

事業報告

平成29年度 中国青年日本招へい

内閣府は、平成29年度日本・中国青年親善交流事業（第39回）による中国青年代表団の招へいを、平成29年10月24日から11月4日までの12日間の日程で実施した。

中国青年代表団は10月24日、中華全国青年連合会副秘書長の張伝慧団長、秘書長及び参加青年の合計30名で来日した。参加青年は、中央または地方の青年連合会幹部、非営利活動団体幹部、企業経営者、マスコミ関係者等で構成されていた。

代表団の今回の訪日のテーマは「NPO/NGOの活動及びNPO/NGOに対する政府の対応」であり、東京の他、広島県及び愛知県を訪問し、各地において表敬訪問及びテーマに基づく各種施設の視察や交流活動を行った。

東京プログラム①（10月24日～27日）

10月24日12時30分、東京国際空港（羽田）に到着した中国青年代表団は、内閣府にて滞在日程に関するオリエンテーションを受けた。

10月25日午前、中国青年は内閣府職員から日本のNPOについて講義を受けた。NPOに関する法律や制度、現状について学び、中国青年からは制度や運営面での質問が相次いだ。

午後は特定非営活動法人ジャパン・プラットフォームを訪問し、世界各地における自然災害の被災者や紛争による難民に対する緊急人道支援の仕組みや運営方法について説明を受けた。また、同団体が過去に行った四川大地震に関しての報告もあり、中国青年からは支援に対する感謝の言葉も聞かれた。

同日18時05分から、団長、秘書長及び代表青年の6名は山下雄平内閣府大臣政務官を表敬した。



山下雄平内閣府大臣政務官を表敬

同日18時25分から品川プリンスホテルにて山下雄平内閣府大臣政務官主催の歓迎会が開かれ、中華人民共和国駐日本国大使館職員、かつての日本青年派遣団団長や今年度派遣の日本参加青年が出席した。

10月26日午前、早稲田大学を訪問した。

大学の概要に加え、学生たちのボランティア活動をサポートする早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）について職員から説明を受け、実際に海外でボランティア活動を行った学生によるプレゼンテーションが行われた。大学概要の中ではかつてWAVOCが中国のハンセン病患者への支援を行っていたことも紹介された。



早稲田大学で質問する中国青年

また、同大学が所蔵している清朝の留学生直筆の資料「鴻跡帖」の説明を受け、同大学と中国との長きに渡る

友好関係を認識した。

午後は社会福祉法人江東園を訪問した。中国青年は、同施設が位置する江戸川区の福祉に関する概要の説明を受けた後、同施設の特徴である「地域包括ケアシステ

ム」「世代間交流」をキーワードに施設の運営や人材育成に関して理解を深めた。その後、保育園と特別養護老人ホームを視察した。

広島県プログラム（10月27日～30日）

10月27日午前、東京から広島へ移動した一行は、広島空港で広島県青年国際交流機構の歓迎を受け、昼食の後、広島県庁にて高垣広徳副知事を表敬訪問した。

同日15時よりマツダミュージアムを訪問し、同社の歴史、技術及び未来への展示を見学し、工場での組立てを視察した。



マツダミュージアムを視察

その後、ホテルに到着した中国青年は18時より広島県の歓迎会及びホームステイマッチングに出席した。当初、会の後半でホームステイマッチングを行う予定であったが、中国青年の方から積極的に会場内の自分のホストファミリーを探しに行き、歓談開始30分後には全てのホストファミリーと中国青年が談笑する姿が会場の至る所で見られた。歓迎会終了後、それぞれのホストファミリーと共に各家庭に向かい、二泊三日のホームステイを行った。

10月29日、中国青年はホームステイを終え、ホストファミリーとの昼食交流会に出席した。ホームステイ前には言葉の問題など一抹の不安のあった中国青年とホストファミリーの双方は非常に打ち解けた様子で参集し、ホストファミリー代表や中国青年代表からそれぞれ「友情が深まった」「温かいおもてなしを受けた」等の挨拶



ホストファミリーと交流

があった。

中国青年は同日12時30分より同昼食交流会にて、市民球団である広島カープを応援するファンが自主的に集まり、野球観戦の機会に恵まれない子供たちのためにチケットを配布しているCARP LIFEプロジェクトの活動紹介を聞いた。中国では見られない活動に、質疑応答の際には中国青年から「球団や選手からの支援がないのはなぜか、支援をもらってはどうか」「フリーペーパー配布はどのような方法で行うのか」等の意見や質問があった。

同日14時30分より、一行は平和記念資料館にて広島市市民局国際平和推進部平和推進課が実施している被爆体験伝承者養成事業についての紹介を受けた。被爆者の高齢化が進み、被爆体験を後世に伝えるため、被爆者から被爆体験を受け継ぎ、伝承する人材育成研修についての説明の後、その研修を修了し、現在語り部として活動を行う伝承者による被爆者の体験発表を聞いた。その後、平和記念公園及び平和記念資料館の視察を行った。

10月30日朝、広島駅では広島県青年国際交流機構の実行委員や、ホストファミリーの見送りを受け、中国青年は新幹線で愛知県へ向かった。

「ヒロシマ」を伝える

受入委員会委員長 兼 友 昭 典 (広島県青年国際交流機構会長)

10月27日(金)から10月30日(月)の三泊四日間の広島プログラムを実施しました。広島プログラムでは、広島県庁での高垣広徳副知事への表敬訪問、マツダミュージアムの視察、ホームステイプログラム、CARP LIFEプロジェクトの紹介、平和記念公園への視察(語り部伝承者事業の説明、伝承者による語り部講話、平和記念公園・資料館の視察)を組みました。



語り部に質問する中国青年

広島への訪問で、私たち実行委員は、原爆が投下され、その思いを伝えていく「ヒロシマ」というテーマに、プログラムの構成と訪問団への発信を考えました。今年、原爆が投下されて72年を迎え、被爆者の方の年齢も高くなり、「ヒロシマ」を伝えていく方法が大きな問題に直面してきている時期でもあります。また、最近の北朝鮮の頻繁な暴挙は、よりその思いを強めたと思います。

平和記念公園の視察では、広島市で実施している「語り部伝承者事業」の説明や現況、また課題について説明



ボランティアガイドの案内の下、平和記念公園を視察

をしてもらい、その後、実際に伝承者による語り部講話を受けました。また、平和記念公園・資料館を視察しますと、訪問団の参加者からは、「核兵器は国としては抑止になるものだと感じていたが、個人としては、その使用は人類が歩むべき道ではないと感じた。」という感想も伺え、実行委員としても、達成感を覚えました。語り部の講話中は、参加者が熱心に聞き入り、話の中で何度もうなずく姿は印象的でした。

マツダミュージアムの視察やCARP LIFEプロジェクトの紹介では、広島の復興や、街と広島の人が支えとしてきた広島東洋カーブとの関係性も紹介することができました。広島について、より知ってもらうことで訪問団の青年たちにも広島の歩み、人々の思いや心を感じてもらえたのではないかと思います。



マツダミュージアムにて

ホームステイプログラムでは、あいにくの天気となりましたが、青年たちから宮島の観光や商店街での買い物などを楽しんだとの報告を受けました。また、天候が悪かったこともあり、訪問宅で話をする時間も取れ、言葉の壁を、スマートフォンの翻訳アプリを使い、夜遅くまで話ができる機会になったとホストファミリーから話も伺いました。

三泊四日の期間でしたが、大きな怪我や事故などなく、プログラムを終えることができました。プログラムの企画・運営に尽力いただいた実行委員の皆様、快くホームステイをお引き受けいただきましたホストファミリーの皆様、また、プログラムに携わっていただいた関係の皆様へお礼申し上げます。

ホームステイ受入報告

広島県ホストファミリー 岡本 敏秀

今回のホームステイの受入れは、貴重な体験で有意義なものでありました。

引き受けに当たっては、私と娘が海外でのホームステイを経験し、歓迎を受け、そのお返しをしたかったこと、私は中国語を勉強し、3年半が経過したが上手にならない中、中国吉林省の中国人と結婚し、一時帰国している娘と6歳になる孫がいたことで言葉の障害がなかったこと、妻が受入れに快く同意をしてくれたことなど条件、環境が整っていたことです。

そうした中、受入れのパーティ会場へは、娘と孫の3人で行きましたが、どんな女性かと期待と少し不安もありましたが、歓迎会が始まると30分を過ぎる頃から、中国の方々30人と広島の関係者が非常に打ち解けた雰囲気になり、以前から知り合いのような気がしておりました。その時、受入れ相手の尤楠に会い、彼女も不安があるようでしたが、娘と年齢が近く、小さい子供を連れており安心し、更に、娘が流暢な中国語で話し始めたことで、お互いに不安よりこれからの楽しみの方が大いに増したようです。

歓迎会も終わり、汽車に乗り最寄りの駅まで帰り、妻が運転し、我が家へ到着しました。彼女は初めてのホームステイで緊張しておりましたが、玄関に入るとシルクロードの絵、パンダの衝立、四川省の刺繍を見て中国を身近に感じ、くつろいだ様子になりました。私は四川省と広島県が32年前に友好提携を締結している関係で、現在日中親善の仕事をしており、中国の方々との意見交換会や留学生との懇談をしており、今回も彼女に県の観光地の中国語版や協会の機関誌を配り、色々説明をしようかと思っておりましたが、娘と孫との会話が弾み、その方が楽しいのだと感じました。このため、私たち夫婦は2階に、彼女たちは1階で寝ることになりました。

翌朝は、パン食でしたが、中国語で話しながらおいしそうに食べており、ほっとしました。あいにくの雨でしたが、予定どおり宮島に行きました。栈橋などで他のホームステイの家族に3組ぐらいお会いし、昨晚別れたのになぜか懐かしくもあり不思議な気もしました。商店街では宮島特産のしゃもじや、もみじ饅頭、牡蠣、あなご飯など珍しそうにし、買い物もしたようでした。その後、鳥居をバックに記念写真、それから神社へ向かいましたが1,000年以上前の海上に浮かぶ寝殿造りには感動したようでした。



宮島にて

昼食は、少し離れた観光客が少ない静かな所でゆっくり食べました。和食で刺身、牡蠣、あなご、釜飯など広島の食事はおいしいと非常に喜んでくれました。予定ではロープウェイに乗り、美しい瀬戸内海を弥山の頂上から見ることにしていましたが、変更し、家電量販店に行き、旦那さんや友達への土産物を買いました。こちらでも免税や中国のクレジットが使える、地方の国際化も進展しております。



ホストファミリーと広島の食を楽しむ中国青年

夕食は近くに住む長女の家族も合流し、8歳の孫娘が非常に喜び、広島風お好み焼きを自分たちで焼いて「熱い、熱い」と言いながら、ビールを飲みながら、楽しい団欒の時間を過ごしました。

このようにあつという間の滞在でしたが、名残り惜しく、別れは涙ぐんで「再見」は北京でもいいねと話しました。今後も娘たちはメールでやり取りする予定です。

このように、素晴らしい時を過ごし、私もライフワークとして日中親善に取り組み、微力ながら友好の架け橋に貢献できればと思っています。

愛知県プログラム（10月30日～11月2日）

10月30日、愛知県に到着した中国青年一行は愛知県青年国際交流機構の青年たちの熱烈な歓迎を受けた。

昼食の後、14時より3グループに分かれ、ボランティアガイドの案内の下、中国青年は名古屋城と、日中国交正常化につながったピンポン外交の舞台である愛知県体育館の記念モニュメントを視察した。

同日16時30分より一行は愛知県公館にて、大村秀章知事に表敬訪問を行った。

表敬終了後には宿泊ホテルで中国青年代表団の歓迎会が開催され、中華人民共和国駐名古屋総領事館の鄧偉総領事を始め、愛知県庁職員、課題別視察先関係者等が出席した。

10月31日午前、中国青年一行は津島市を訪問し、津島市の概要やボランティアガイドの取組などについて説明を受け、ボランティアガイドの案内の下、津島市を視察した。昼食時には日比一昭津島市長が中国青年に挨拶を述べた。

同日午後、中国青年は太鼓作りに900余年の歴史を持つ新田新五郎商店を訪問し、伝統楽器の製作、技術の伝承や後継者について店主から説明を受けた。

新田新五郎商店訪問後には、中国青年は愛知県立津島高等学校を訪問し、生徒との交流や部活動の視察を行った。



生徒たちの熱烈歓迎

11月1日午前、中国青年はアイシン精機株式会社コムセンターを訪問し、会社概要やCSR活動を中心に説明を受け、会社成長の歴史や歴代の製品、住生活におけるエネルギー製品等の展示を視察した。

同日午後、一行は南医療生活協同組合総合病院南生協病院を訪問し、生活協同組合によって運営される病院の仕組み、未病の段階でも病院に来る環境づくりなどについて説明を受けた後、施設見学を行った。また、併設されている「よってって横丁」を視察し、中国よりも高齢化の進んでいる日本での高齢化対策について理解を深めた。

11月2日、中国青年は国土交通省中部地方整備局を訪問し、災害発生時の指示系統や最新の防災機器についての説明を受けた後、実際に設備を視察し、ドローンやショベルカーなどの操作体験を行った。



最新の災害対策機器を視察

同日午後、中国青年は新幹線で東京に向けて出発した。

次に繋がる活動とするために

受入委員会 伊藤 朋江（愛知県青年国際交流機構）

今回、愛知県での受入れが決定したのは8月、受入れ本番までの準備期間は3か月を切っていました。平成23年度に内閣府の国際交流事業に参加し、それ以来何度か地方プログラムの受入れに参加してきましたが、ここまで準備期間が短いことは初めてでした。また、受入れ決定当初、実働できるコアメンバーが少なかったため、運営の仕方についても考える必要がありました。

そのような状況の中で、今回はコアメンバーであらかじめ訪問先を固め、その後実行委員会においてそれぞれの担当を決めて詳細を詰めるという方法で進めました。それによって、短期間でプログラムを効率よく作り上げることができたと思います。

また、私個人としては、今回の受入れを、これまで地方プログラムに関わったことのない既参加青年や、事業参加予定の青年の事後活動に参加するきっかけとしたいと考え、初めての方でも参加しやすい場づくりを心がけました。最終的に、本受入れを行う上で、愛知県内の約30名のスタッフに関わってもらうことができました。しかも、今回受入れ事業初参加のメンバーが約半数を占め、積極的に活動に関わり、活躍してくれました。皆さんに本事業に対してポジティブな印象を持ってもらうことができ、個人的な目標は達成できたと感じています。



名古屋駅で中国青年を迎えるスタッフ

受入れのテーマとして「NPO・社会活動」を挙げ、多くの社会活動をされている方々の姿を見られるよう工夫しました。中国国内で活躍されている中国青年の方々が、地

域で観光ボランティアガイドとして活躍されている方々に積極的に質問をしたり、交流をしたりしている様子が見られ、相互に良い影響があったと思います。私自身も青年の中国での活動の内容や、社会問題について詳しく聞くことができ、より中国の事を身近に感じることができました。一方で、私自身が仕事をする傍らでこのように受入事業に携わっていることについても興味を持っていただき、自分自身の活動のモチベーションを上げる良い機会にもなりました。人と人が直接会って会話をするということは新聞やニュース等から情報を得るよりも親近感が感じられ、「より物事に対して興味を持つことができる」と再認識させられました。



名古屋おもてなし武將隊と名古屋城を視察

気付けば、受入事業に参加してから6年が経ちました。プログラムを組む上で、その国の人々の文化・慣習に配慮したり、愛知の良さを伝えるためにプログラム内容を工夫したりすることで、毎回新しいノウハウを学ばせていただいています。6年前は分からないことばかりで言われたことをやるだけで精一杯でしたが、今回多くの新しいメンバーに関わってもらえたことで、次は自分が学んできたノウハウを伝えていく必要もあることを実感しました。今後、受入事業に関わらせていただくことで自らの異文化理解を深めると共に、自ら学んだノウハウを伝えていくことで受入事業と組織のより良い運営に貢献していくことができると良いと思います。

初めての受入事業

受入委員会 横山 多恵 (愛知県青年国際交流機構)

受入れ初日。初めはとにかく1日が無事に終わり、中国青年が満足して帰国できるようにとばかり考えて行動していました。一緒に学び、交流を楽しむことができるようになったのは二日目頃からです。

私が今回参加した目的は、愛知県をより深く知るためでした。実際に三河と尾張それぞれの様々な分野について広く学び、体験できるスケジュールで、新しい発見や学びをたくさん得ることができました。どの訪問先でも賢くて鋭い質問をする中国青年団の魅力的な姿に、どんどん引き込まれていきました。

そんな中国青年団の津島高校での生き生きとした姿はとても印象的でした。



剣道着を試着する中国青年



高校生とダンスを踊る中国青年

合間を縫って一生懸命練習していた歌とダンスを中国青年が披露し、高校生と盛り上がっている様子から、「人と人の心を結ぶのに大切なのは、年の差や国籍、話す言葉でなく、伝えようとする気持ち」なのだということに改めて気付かされました。質疑応答はとても素直な交流で、中国では学生の男女交際が基本的に禁止されていることな

どを知り、学生時代恋にうつつを抜かしてばかりだった私は大変驚きました。また中国青年の「どのような人をリーダーとして選びますか？」という質問に対する、「皆に平等に接することができる人」という高校生の回答に大変感動しました。



茶道部で着物の着付けを体験

プログラムの中での反省は、初日が終わった段階で「中国青年は時間どおりに動いているのに、日本人スタッフが遅れている」という意見が出てしまったことです。

実際、バス乗降時の日本人スタッフの人数確認に時間がかかり、中国青年が揃っているのに出発できない事案が発生していました。スタッフ名簿の顔と名前が一致していなかったことと、事前連絡なしで突然参加してくれたスタッフメンバーが誰か把握できなかったためです。最終的に日本人スタッフは間に合わなければ置いていくと割り切り、以降大変素早く発車することができるようになりましたが、先人たちが築き上げてくださった時間を守る日本人のイメージが崩れてしまったのではと青ざめ、反省しました。

このようにバタバタしたスタートでしたが、沢山の方々から助言として「何を把握して今どう行動しなければならぬか」を教えていただいたおかげで、無事に四日間を終えることができました。中国青年も帰る際は皆さん笑顔で楽しかったと言ってくださり大変うれしかったです。

このプログラムに参加したことで、私自身に大きな変化が起きました。大学卒業後、少し国際交流が怖くなっていたのですが、やはり国際交流は楽しく、もっともっと色々な人や国、文化を知りたい!と心から思うことができました。

このような素晴らしい機会を与えてくださった皆様、受入事業に携わってくださった全ての皆様に、心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

東京プログラム②(11月2日~4日)

11月2日午後、中国青年代表団は愛知県から東京へ戻った。

11月3日午前には、TKP品川カンファレンスセンターにて三つのテーマに分かれ、それぞれの分科会での基調講演、意見交換を行った。

分科会①「政府と協働または、政府の仕事を請け負うNPO・NGOについて」では、特定非営利活動法人日本NPOセンターの吉田建治事務局長より、日本での政府と民間の協働の現状及び課題について説明を受け、NPOに求められる姿勢について日本青年と意見を交換した。中国青年からは「中国も日本同様三つのP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）を重視しているが、法整備に関しては日本の方が進んでいる」という声が聞かれた。



基調講演に耳を傾ける日中の青年（分科会①）

分科会②「青少年関連のNPO・NGOについて」では、認定NPO法人カタリバの白田好彦マネージャーより青少年分野のNPO・NGOの現状の説明及びNPO法人カタリバの活動紹介が行われた。質疑応答ではNPOの運営に関する具体的な質問から日中両国の青少年育成の現状まで、中国青年及び日本青年双方から活発な意見交換が行われた。



意見交換をする日中の青年（分科会②）

分科会③「社会課題の解決に取り組むNPO・NGOについて」では、認定特定非営利活動法人育て上げネットの山本賢司理事・事業戦略室長より、同団体がやっている無職の若者への支援活動が紹介された。中国青年からは引きこもりの子供を持つ親へのアプローチ方法や情報発信に関して質問が挙がった。



熱心にメモを取る中国青年（分科会③）

全体会では分科会で得た成果を共有し、更なる理解を深めた。その後、中国青年は各自都内を自由視察した。

11月4日14時20分、中国青年代表団は12日間の日程を終え、東京国際空港（羽田）から帰国の途に就いた。